

社員の素顔を共有する

体温を伝えたいから紙にこだわる

ウイル (兵庫県宝塚市)

社内報の企画内容を競うコンペで多数の受賞歴がある「モーレッツ WILLS!」は、2008年から13年まで「特集企画部門」に5回エントリーしていずれも入賞。「表紙」部門でも入賞多数。社内報のコンセプトは明確で、とにかく社員の人となりを紹介することに徹底している。

「ウイル」は、ヤスダックに上場するウイル(不動産販売、住宅リフォーム等)の社内報「モーレッツ WILLS!」の発刊サイクルは年4回。A4サイズで毎月約20頁。2013年には、ナナ総合コミュニケーション研究所が主催した「第12回全国社内誌企画コンペティション」において3部門(表紙部門、連載・常設部門、特集・単発企画部門(1〜7頁以下)企画部門)で「ゴールド企画賞」を受賞した。

全体的に、若者向けタウン誌のような雰囲気。若い社員が大勢登場しているのがその理由かもしれない。そして、経営者や経営幹部の露出が非常に少ないという印象を受ける。「社長からのメッセージ」的なものは常設コーナーになっておらず、岡本俊人社長が登場するのは平均すると年1回程度。制作しているのは専業スタッフでは

なく、同社の営業推進グループ営業企画チームに所属する若手社員。企画、取材、レイアウトまですべて内製し、これを実質的に3人が業務の合間の時間に行っている。営業企画チームは広告制作やHP制作なども行っているが、ページものは本業ではない。しかし、社内報をインターネットに移行する考えはないそうだ。営業企画チームの焼田美奈リリーダーは、「私たちは体温を伝えたい。紙には温かみがあるし、手元に残ると言う。」

試みにDVD版を作ったことがあるが、社員の反応はあまりよくない。PCの前でない視聴できないのは、想像以上のハードルだった。

社員数は現在グループ全体で114人。ウイルが社内報を発行したのは創業からちょうど2年が経った95年12月、社員数15人の頃。営業拠点が2カ



毎号の目玉記事は四半期成績でMVP表彰された社員の情報や人物像を伝えるロングインタビュー



笑わずに読むことは不可能な人気の投稿コーナー「THE KONETA」

所になり社員どうしが顔を合わせる時間が減る。翌年春に初めての新卒社員11人を迎える……。そんな時期に、「別々の拠点で働くが、同じ会社で働く社員がどんな人なのか共有したい」という思いからスタートした。そのコンセプトはいまも変わっていない。実際、社員同士の会話のきっかけになる話題が満載だ。

もつと多くページを割いている記事は、四半期ごとに表彰されるMVP社員(営業成績優秀者)の紹介記事。「連載・常設部門」で何度も受賞しているレギュラーコーナーで、MVP表彰を受けるまでの道のりを振り返っても、仕事に向かう姿勢などを聞き出

している4頁〜6頁のインタビュー記事。仕事への熱い思いや人物像が伝わってくる。業種が違う社外人間が読んでも引き込まれる内容だ。

準メインともいえるもう一本のレギュラーコーナーが、「働哭の手記」。タイトル通り、社員が執筆した「手記」形式の2頁記事で、困難な状況を乗り越えたストーリーが綴られている。



社内報のコンペで多数の受賞歴があるウイルの「モーレッツ WILLS!」。若い社員が多い会社らしい

明日への活力と笑いを届けたい

常設コーナーにはこのほか、社内行事の開催報告、結婚した社員の紹介、子どもが生まれた社員の紹介、宅建試験合格者の紹介といったものがある。ちなみに、同社は社員旅行が年4回あり、10月には運動会を行っている。この運動会は翌春入社する社員の内定式を兼ねており、「ユニークな内定式」として多くのメディアで紹介されている。

だが、社内報制作を担当する堀川憲一リーダーは、「社員がまっさきに開く常設コーナーは、小ネタページでしょう」と笑う。これは日常の仕事の中で発見した、同僚の意外な一面や笑い話が投稿されたコーナー。同僚への感謝や顧客からももらった嬉しい言葉も紹介されているが、基本的には社員の一面を紹介するという趣旨。

「配られた日の朝は、仕事を手につかない社員が多いと思います(笑)。「そうそう、あの人がって、こんなところある」という楽しみもあるでしょうし、「自分の投稿が掲載されるかな」という楽しみもある(堀川リーダー)



社内報制作を担当する営業企画チームの堀川憲一リーダー(左)と焼田美奈リーダー

社内報ができると、全社員にアングレイトを。次に取り上げてもらいたい内容、注目の社員などの情報を募る。このほか、専用のメールアドレスを設け小さなネタを随時募集している。「時間が経ったら忘れてしまうことはたくさんある。目前で起こったことをすく「ネタ@」にメールしてもらっています(焼田リーダー)。たくさんのお望みや提案、小ネタが寄せられるため、毎回、何を削るかに悩むという。苦労はやはり、本業の合間の作業のため、締め切り前には残業が増えること。もうひとつは、ゲラの段階で「これでは普通。もっとパンチをきかせろ」と岡本社長からダメ出しをされ、企画から練り直さねばならないことが、ま

れにあること。

最後に、社内報作りで心がけていることについて伺った。

「社員が毎号を楽しみにしてくれるものを作る。「明日からまた頑張ろう」と思えるものを作る(焼田リーダー)」

「読む人を驚かせた。同僚について、「知ってるつもり」になるのはよくない。知らないこと、意外な側面はたくさんあります(堀川リーダー)」